２００６年8月３１日

財団法人 国際協力推進協会

第三回 開発教育／国際理解教育コンクール事務局 御中

【国際理解教育プログラム実施報告書】

プログラム名：「翔平くんからの手紙」

～バングラデシュから届いた手作りバッグの行方～

～国際理解教育を輪でつなぐ～

実施日：２００５年１１月２９日

実施場所：オポロジェヨ・バングラデシュ

ドロップインセンター

対象人数：およそ５０人

プログラム企画実施者

牧 紳太郎

【 お願い 】

この「教育プログラム実施報告書」は、
別途作成の「海外取材紀行文」を改編したものです。

途中、不適切な表現等がありましたら、
お手数ですが、その旨を牧までお知らせください。

牧 紳太郎
０９０－２０１１－７１０３
makishin1972@yahoo.co.jp

回想

私は、昨年２００５年３月～９月の愛･地球博全期間を、「ＥＸＰＯエコマネーセンター」というパビリオンで過ごした。主に、来場者への環境教育・国際理解教育プログラム実施者として、地球上で起きている様々な問題を、来場者（主に、小中学生）にわかり易く説明することが、私の使命だった。

バングラデシュは、私の実施するプログラムに度々登場する国だった。その理由として、①日本と同じ「日の丸」の国旗であること。②首都ダッカの４５万人にもおよぶ、初等教育でさえも受けられない、または、死別・生活苦などの理由で親の置き去りにされるなどの理由で路上生活を余儀なくされているストリートチルドレンの子供たちについての話題。③レジ袋の撤廃国であることなどが象徴的であったためである。また④世界有数の大デルタ地帯の広がる国であり、温暖化の影響は深刻な被害が想定されていることなど、そこで暮らす人々の生活は、決して恵まれているとは言いがたいものであるから。

これらを紐解き、万博という性質上、「共生」をテーマとしたプログラムに多用していた。

写真左：プログラム実施中の私。大人よりも、感受性の高い子供たちの耳に届くことが多かった。
ここで漫画やクイズ･小道具を用いた、「教育プログラム」の開発･実施をしていた。

写真右：ある日の「ＥＸＰＯエコマネーセンター」の風景。延べ６０万人ものエコ市民が誕生した。

翔平くんとの出会い

２００５年５月 愛･地球博の場内も閑散としてくる午後７時過ぎ。小学５年生（当時）の翔平くんは、お母さんと共にエコマネーセンターに入ってきた。翔平くんは、お母さんに促され、私に話しかけてきたのがそもそもの始まり･･･。

彼は自分の掲げた夏休みの自由研究課題「地球温暖化の正体」について取材するために、その日１日を費やして愛･地球博に足を運んでいた。彼には、主に化石資源利用がもたらす温暖化への影響や、温暖化をこれ以上進ませない重要性、既に起きてしまっている問題などを、諸外国の生活を例に挙げながら１時間半に渡って教えることとなる。別れ際、自由研究が完成したら、その成果を送ってくれることを２人の約束とした。

そして愛･地球博の閉幕が迫った９月のある日、一本の電話によって彼との思い出がよみがえる。彼から、「自由研究が学校で金賞をとった！」との連絡が入ったのだ。その後、約束どおりに彼の自由研究が千葉から愛知の万博会場へと送られてきた。

これが、実にすごい。５８ページにもおよぶ、まるで大学の卒業論文かと思う出来栄えに、一方的になりがちな教育が「気付きと行動」をもたらす結果となったことが嬉しかった。

教育プログラムの誕生

私は万博閉幕後、自らの教育分野の見聞を広めるため海外取材に出かけようと決めていた。ある日、まだ別々になっていた「１本の線」同士を、今回の旅で「円」として結び合わせることを思いつく。翔平くんの自由研究の中に、バングラデシュのストリートチルドレンの子供たちが作った新聞紙リサイクルバッグについての記述を思い出した私は、日本で彼らのパートナー団体である「シャプラニール＝市民による海外協力の会」に連絡をとった。

ここで、バッグを作った子供たちが、「オポロジェヨ・バングラデシュ」という、彼らにとってシェルター的役割をはたす自立支援施設に通う子供であることを知る。

後日、私はシャプラニールに赴き、趣旨を説明し、新聞紙リサイクルバッグを翔平くんのもとへ送ってもらうよう手配した。数日後、彼から喜びの電話があった時、「バッグを作った子供たちに手紙を書いてみない？」と提案したのである。

私自身が、翔平くんからもらった自由研究によって勇気づけられたのなら、バッグを作ったオポロジェヨの子供たちにも「手紙」という形で、その想いをつなげることによって、翔平くんにも、オポロジェヨの子供たちにも「喜び」を分かち合い、「物づくりにおいて重要なこと」を伝えることができるのではないかと考えた。こうして１本の線同士をつなげることによって、双方の心の中に「新たなもの」が生まれることを期待したのである。

教育プログラム実施概要

構成は以下の通り。(①～⑧まで６０分)

① あいさつ（アプローチ）…… 覆面姿で登場「この人だぁ～れ？」
② 導入 …… 世界地図でクイズ「日本とバングラデシュ」
③ 導入 ……「どんな乗り物で行く？」
④ 展開 ……「物を作るうえで大切なこと①」
⑤ 本題 ……「翔平くんの手紙と自由研究の紹介」
⑥ まとめ ……「物を作るうえで大切なこと②」
⑦ まとめと共有化 …… 質疑応答
⑧ 歌のプレゼント
⑨ あいさつと写真撮影（クロージング）
⑩ 個別インタビュー（フィードバック）

※同時通訳者の方との進行

項目別意図

①（アプローチ）では、非日常の雰囲気を創り出すことに重点を置いた。通訳の方から子供たちに「人間じゃないかもしれない」と紹介をしてもらい、傍によってきた子供たちに、吠えてみたり、体を大きく動かしてみたりしていた。

②③（導入）では、まず日本とバングラデシュの距離の遠さを理解してもらうことに重点を置いた。のちに、「自分たちはそんなに遠くの人の心を動かしたのか！」と気付いてほしかったことに他ならない。

④（展開）の「物を作るうえで大切なこと①」とは、何事も１人前になるには時間がかかるだけでなく、我慢や苦労の連続であることを話す。子供たちに辛抱強く、自分の目標に取り組んでいけば、「必ず苦労が報われる時が来る」ということを理解してもらいたかった。

⑤（本題）「僕は君たちに会いにきただけではなくて、実はね、手紙を･･･」と、「翔平くんからの手紙」を読み聞かせると同時に、自分たちが作ったバッグを両手に持って喜んでいる「翔平くんの写真」を見せることによって、④で述べた「報われる瞬間」としたかった。また子供たちが作ったバッグを例に挙げながら、翔平くんが素晴らしい自由研究を作ったことも話した（注）。ここでは、子供たちが地道にやってきたことが、遠く離れた翔平くんの心に「喜びを与えた」ことに留まらず、彼のさらなる「成長を促す」ことにもつながったことを伝えたかった。今度は、この子供たちが翔平くんによって、「自信」や「希望」を持って、今後の人生を生きていってもらいたいという願いを込めた。

（注） 地球温暖化については簡単な説明をした程度。新聞紙リサイクルバッグの記事を中心に触れた。

⑥（まとめ）の「物を作るうえで大切なこと②」では、「もの作り」には、常に創意工夫が重要であり、使う側の人がどのように使っていてくれているのか、もっと使いやすくするにはどうしたらよいのかと常に考えながら、日々の自分自身の技量を高めていってほしいとの願いを込めた。これは、私自身がこれまで、テレビ番組制作、トヨタ、万博での教育プログラム開発で学んだことの共通する意識であり、質の向上が、より自分自身を高めてくれるものであることを信じているからである。

⑦の（共有化）については、教育現場には最も重要な点であるように思っていて、１人が気付いた問題意識や行動意識（今後どのように行動していこうという意識）を、１人１人が発表しあうことで、同じ点に気付くことのできなかった子供たちにも意識付けがなされ、「心の引き出しが増す」と言うべきか、多くの意識を共有できる手段であるように思う。

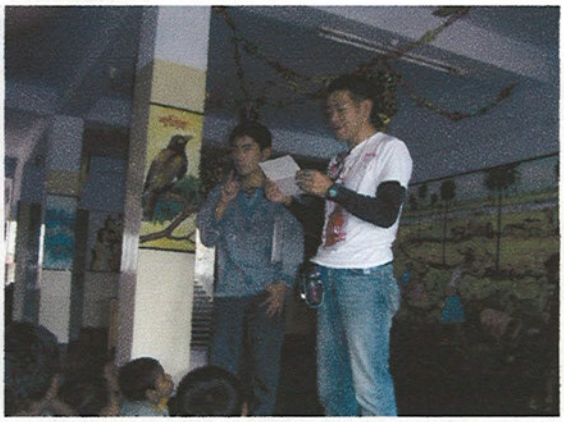
⑧歌のプレゼントとは、私が幼少時期を過ごした、エジプト・カイロ日本人学校時代に、帰国していく友達へ向けて歌っていたものをプレゼントした。この歌は、別れの歌だが、離れていても心はひとつ！いつの日かまた会おうね！との意味が込められている歌である。

⑨明るく元気にこれまでの話をおさらいし、今後の人生においてまだまだ辛抱や努力を積み重ねていかないといけないけれど、負けずに頑張っていってね！必ずまた良いことがあるよ！との話にまとめた。

⑩個別インタビュー（フィードバック）は、私が帰国後、日本の子供たちに向けて行なう「総合学習向けの教育プログラム」に役立てると同時に、私がオポロジェヨの子供たちに与えてあげられたものを再確認したかった。

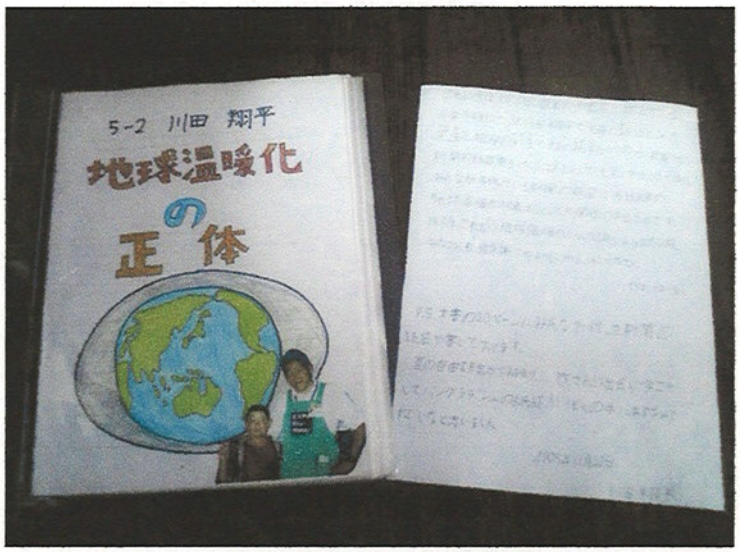
上の２枚が、①～③の「アプローチ～導入」の様子。下の２枚が、④の「展開」部分。「もの作りとは･･･」

下の２枚は、⑤の「本題」。翔平くんの手紙を読んでいるときの子供たちの視線は真剣そのものだった。



写真を見せる･･･翔平くんの手元にあるのは、以前自分たちが作ったあのバッグ。手紙を渡し終了。

翔平くんの写真を持って全員で１枚。この直前まで、子供たちは嬉しそうに写真の争奪戦をしていた。



左が自由研究　右がオポロジェヨの子供たちに宛てた手紙。

次ページから、⑩で行なった「個別インタビュー」の模様。

「個別インタビュー」

質問内容は名前と年齢と家族構成と４つの質問。

①今までの人生で一番嬉しかったこと

②今までの人生で一番悲しかったこと

③今一番欲しいもの

④将来の夢

通訳の方には、

直訳でお願いしてあるので

実際の子供たちの声と思って読んでいただきたい。

モハンマド ロフィックくん　１４歳

父と母、弟、妹２人の６人家族。

この子はオポロジェヨに通う子供たちの中では、比較的、年齢も上で質問なども積極的にしてくるリーダー的な存在。とても謙虚で気配りのできる子だった。

① 今までの人生で一番嬉しかったことは？

今日のこと。今会ったばかりで信じてもらえないだろうけど、こんな日が来るとは夢にも思わなかった。大人に気を遣ってるんじゃない。本当に本当に信じてください。自分がしたことで誰かにこんな喜んでもらえることがとにかく嬉しかったです。また頑張ろうと思います。

② 今までの人生で一番悲しかったことは？

田舎から家族と一緒に初めてダッカに出てきた時のこと。わずかなお金しか持ってないから、人間扱いをしてもらえなかったことです。

③ 今一番欲しいものは？

僕は電気の勉強をしているから、そのチャンスが欲しい。もっともっと勉強したい。そのためにできるだけ努力しています。

④ 将来の夢は？

電気屋さんになること。

ハシナ アクタルちゃん　１１歳

父親は知らない。弟はずっと前にいなくなった。今は母との２人暮らし。

この子は、どうしてもレンズを見ることができないとても恥ずかしがり屋さんで、何回も写真を取り直した。

① 今までの人生で一番嬉しかったことは？
オポロジェヨに来れたことが一番嬉しい。

② 今までの人生で一番悲しかったこと？
母と路上にいて苦しみながら物乞いをしていた時のこと。路上で生活していた時は、殴られたり、ひどい仕打ちを受けていたから。

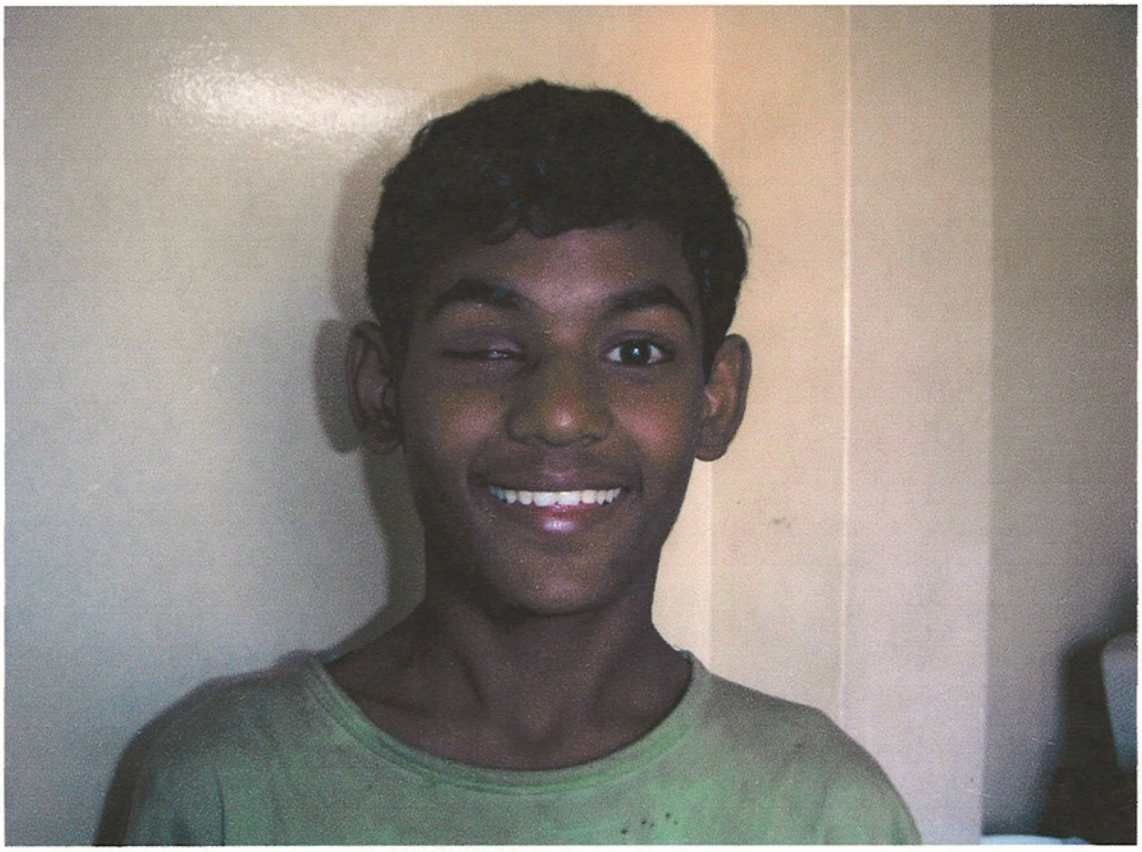
③ 今一番欲しいものは？
刺繍の技術が一番欲しい。絶対に続けたい。それが一番欲しいもの。

④ 将来の夢は？
刺繍や裁縫のプロになるんだ。

サイフル イスラムくん　１２歳

お父さんは死んだ。母と兄２人の４人家族。

この子は右目の視力を失っているが、私が話をしている時も身を乗りだして真剣なまなざしを向けていてくれたので印象的だった。笑顔の良さはオポロジェヨ一番と言っていい



① 今までの人生で一番嬉しかったことは？

ここに来て勉強することができて、自分の名前を書けるようになったことが一番嬉しい。外に住んでいた時は、すごく汚いところで、すごい大変な暮らしをしていたから。

② 今までの人生で一番悲しかったことは？

お母さんとスラムに住んでいた時、お母さんは僕に稼がせるために他人の家に出した。僕は、嫌で嫌で仕方なくてその家から逃げ戻ったのに、お母さんにも追い出された時のこと。

③ 今一番欲しいものは？

服が欲しい。このＴシャツ一枚しかない。服が無かったら恥ずかしくて生きていけないよ。

④ 将来の夢は？

医者になりたい。そのために最後まで勉強したいです。同じ境遇にいる貧しい子供たちを助けたいから。

インタビューをふりかえって（まとめ）

ここで私が多くを語るよりも、この３人の子供たちの言葉で読む人の心に充分届くはず･･･。

何よりも良かったと思えることは、１番目のモハンマドくんの一言。彼は、今までの人生で一番嬉しかったことが「今日のこと･･･こんな日が来るとは夢にも思わなかった･･･また頑張ろうと思います」と言い残してくれた。このことだけで、私は充分に報われた。彼はしきりに「嘘じゃない！本当です！」「信じてください！」と訴えていた。当然、信じないわけがないが、彼がこうして大人たちを前に訴える姿を見ていると、彼がこれまでどれほど虐げられて生きてきたのかがこちらに伝わってきて、彼が訴えれば訴えるほど胸が痛くなったのを思い出す。

２番目のハシナちゃんもそうだ。「オポロジェヨに来れたことが一番嬉しい」と残している。３番目のサイフルくんも同様な言葉を残している。どの子の言葉も、路上に暮らすことの過酷さが伝わってくる内容だ。同時に、親子の離散や死別といったこともこの年齢の子供にとってはあまりにつらい話。

そして、「今一番欲しいものは？」に対しての答えもまた、身に詰まされる思いに至った。この質問は、何度か意味が通じていないのかと思い聞きなおした。しかし、何度聞いても同じ答えが返ってきた。事前に「愛情」などの物質的でないものでも構わないとだけ付け加えて質問したのだが、そのうち２人が身を立てるための「技術」や「チャンス」が欲しいと言い残したことは驚きだった。残る１人はサイフルくんだが、彼も次の質問に対する答えで、前の２人と同様、将来の夢に向けて、やはり「勉強」がしたいと言い残している。

私は正直なところ、１人くらいは「お金」と答えると思っていた。とても失礼なことだが、インタビューが始まるまで、心配していた部分が少しばかりあったことは事実。しかし、この子供たちの言葉を裏付けるのは、「オポロジェヨ」の名前に由来する。そもそも「オポロジェヨ」とは「決してあきらめない」という意味であるが、子供たちの言葉にしっかりとその精神が反映されていることが心強く感じた。人間は時として易きに流れやすいものだが、彼らはそんな一面を微塵も感じさせない。私たちこそ、逆に見習うべき点が今回のインタビューでたくさん挙がったような気がする。

こうして翔平くんの手紙を、あの新聞紙リサイクルバッグを作った子供たちの下に、無事届けることができた。普段の生活ではなかなか実現しない、遠く海を越えた心の通い合い。特に小学生では難しい。今回の私はプレゼンターの役目でしかなかったのかもしれないが、翔平くんの手紙によって、勇気付けられた子供たちは、他にもたくさんいるはずだろう。

国際理解教育を輪でつなげる教育的効果はあったと私は思う。
これを今後いかに活用していくかが求められている。

こんにちは、ぼくは、日本の千葉県に住んでいる小学5年生(11さい)の川田翔平です。母の政江と、父の定生と、祖母の和子と、妹の桃子(6さい)の5人家族です。

新聞の紙袋見ました。とってもきれいです。ありがとうございました。

みんなが今作っている新聞の紙袋は、今話題の、『地球温暖化現象』にとっても関係のあることです。

ぼくは、これから地球温暖化について調べようと思います。

みなさんも体をこわさぬように、がんばって下さい。

では、さようなら。

P.S. 本書の20ページにみんなが作った新聞の紙袋が書いてあります。

夏の自由研究から初まり、牧さんに出会い、今こうしてバングラデシュの紙袋がぼくの手にあるなんてすごいなと思いました。

2005年11月20日

川田翔平

HP
Shopla Neer
Shopla Neer
HILLS POLO
2005.11.20

Shopla Neer
2005.11.20